

地震から命を守る

日本ではこれまでに多くの大地震が発生し、大きな被害を及ぼしています。平成23年の東日本大震災をはじめ、平成17年の福岡県西方沖地震や平成28年の熊本地震など私たちの住む身近な地域でも大きな地震が発生しました。また、本年1月には能登半島地震が発生し、強い揺れによる建物倒壊や津波、大規模火災などにより甚大な被害が発生しました。しかしながら、時間が経ち日常生活が戻ると、人々の記憶は薄れてしまいます。いつどこで発生するかわからない地震による災害に備えて、家庭や個人でもできることから防災対策に取り組みしましょう。



▲令和6年能登半島地震(石川県かほく市)

出典：(一財)消防防災科学センター「災害写真データベース」

地震だ！揺れを感じたらどう動けばいい？

屋外にいる場合

- ・窓ガラスや瓦などの落下物から、カバンなどで頭を守り、近くの空き地や公園などに避難する。
- ・落石や崖くずれに巻き込まれないよう、すぐに崖から離れる。

エレベーターの中にいる場合

- ・すべての階のボタンを押し、停止した階で外に出る。
- ・閉じ込められたら非常ボタンやインターホンで連絡を取り、救助を待つ。

車を運転している場合

- ・ハザードランプを点灯させ、徐々にスピードを落とし道路の左側に車を止め、エンジンを切る。避難するときは鍵を付けたままにし、ドアロックをしない。



津波が発生した場合

大きな地震が発生したら津波が押し寄せることがあります。押し寄せてくる津波から命を守るには「直ちに津波が届かない高い場所へ避難する」しか手段はありません。津波が発生したときに速やかに行動に移せるよう、平時から避難する場所を決めておきましょう。

屋内にいる場合

地震発生時

- ・まずは身の安全を確保する
- ・緊急地震速報が鳴ったり大きな揺れを感じたりしたら、丈夫な机の下や物が倒れてこない空間などに移動し、揺れがおさまるまで様子を見る

揺れがおさまったら

- ・火元を確認する
- ・割れたガラスなどでけがをしないよう靴をはく
- ・脱出口を確保する

しばらくしたら

- ・安全が確認できるまで電気や火は使わない
- ・非常持出袋を準備する
- ・テレビやラジオ、インターネットなどから正しい情報を入手する

問い合わせ先
役場地域協働課
☎ 963-1734 (直)

地震に備える

●非常持出品や備蓄品を準備する

非常持出品は家族構成を考えて必要な分だけ準備し、避難する時にすぐに持ち出せる場所に保管しましょう。また、食料・飲料水などは最低3日分を備蓄しましょう。

非常持出品の例

非常食、飲料水、携帯ラジオ、懐中電灯、貴重品、救急医薬品や衛生用品など

※特に生活に欠かすことができないメガネや補聴器、持病の薬などは必須です。

備蓄品の例

食料品、飲料水（大人1人当たり1日3リットルがめやす）、衣類・生活用品など

※断水や下水管損壊などにより自宅のトイレが使えなくなることがあります。携帯トイレや簡易トイレ、紙おむつやトイレトーパーなども備蓄しておきましょう。

ローリングストック法

保管している非常食などを、定期的に消費し、その分をあらためて補充することで「食べながら備蓄する」ことができます。



●防災情報の取得（一例）

防災行政無線

屋外のスピーカーや戸別受信機から防災情報や避難情報を音声放送します。

放送を聞き逃したら、電話応答サービス（☎0800-200-8123（通話無料））に電話をすると内容を聞くことができます。



緊急速報メール・エリアメール

気象庁が配信する情報（緊急地震速報や津波警報など）、町が発信する避難情報などを、特定地域内のスマートフォン・携帯端末に対して一斉配信します。

その他の防災情報は、令和4年8月に広報と一緒に配布したハザードマップをご確認ください。町ホームページでも見ることもできます。



▲町ホームページはこちら



災害派遣職員がみた被災地の現在



▲地域協働課安全安心担当
山本主任主事

令和6年能登半島地震に係る被災地への職員派遣として、4月22日から5月1日までの10日間、石川県穴水町役場に行きました。現地では、被災家屋の状況に応じた支援金申請の受付を行いました。

受付を行った庁舎にはひび割れで立入禁止になっている場所や、窓が割れた状態のままブルーシートで隠しながら業務をしている場所がありました。また、震災後から十分な休暇がとれていない職員もいました。

被災された住民に当時のことを伺うと「車が家屋の下敷きになったが、家族全員が無事だったことは奇跡的だった」と語られていました。また、近所のみなさんと一緒に震災後の手続きに来られている人もいました。

今回の経験を通して、住民だけでなく職員も同様に被災をしていることを知り、日ごろからの備え、地域での協力・つながりの重要性を再認識しました。いつどこで発生するかわからない災害に対して備え、町と地域が協力して防災に取り組む体制づくりと防災対策の周知に、より一層取り組んでいきたいです。



▲1階部分が崩れて車が挟まっている建物



▲今もなおがれきの片付けが進んでいない現場